

---

# 巻き込まれ体質の傍観者

—

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

巻き込まれ体质の傍観者

### 【Zコード】

N5062X

### 【作者名】

—

### 【あらすじ】

事勿れ主義の主人公・春山玲慈<sup>ハルヤマキヨウジ</sup>が、父親の借金を返済するために謎の海外組織（もしかしてマフィア？）に拉致され、こきつかわれ、気に入られる。そんな話

## つけられた俺

俺をRPGとかで例えるなら、「通りがかりの村人」とかじゃないだろうか。

旅先でもう知ってるような豆知識を教えてくれる、はつきりいつてどうでも良い、とるに足らない存在だ。

そういうモブキャラはだいたい表情がない。だつてゲームをやつている人はそんなモブキャラの事は気にもとめないから、表情を作るだけ金がかかることを知ってるゲーム会社が表情を作らないせいだろう。

まさにその通りがかりの村人的存在である俺も、あまり感情の起伏というのが激しくない。それに顔面の筋肉が硬直しているのか、ほぼ無表情だ。そして、それが原因で唯一の肉親である父親から嫌われているのも良く分かっていた。

父は俗にいう主人公タイプというやつで人に喜んでもらうのが好きな人だつた。だからよくものを買ってきては俺にくれたものだつたが、素直に喜びを表現できない俺にとつては最早苦痛でしかなかつた。

そのたびにこいつは俺の子供じゃないと酒を飲みながら大声で近くに言いまわつたり、ギャンブルをしてやるせない思いをぶつけていた。何処かで遅くまで遊んで帰つてこない日もあった。

だがそれも今となつてはどうでもいい。

そんな父親はもうこの世にはいない。

昨日死んだからだ

さんざん遊んで貯めたらしい借金三億円を俺につけて。

事の顛末はこうだ。

父さんの葬式が終わり家に帰るとそれなりにデカイうちの家のドアに「差し押さえ」というシールのような赤い札が張つてあった。まだ夕方にも関わらずあたりはそろそろ冬のせいか大分暗くその差し押さえシールが異様に光つて見えた

ドラマとかにある借金とりが張り付ける札だよな…なんでもうちに…

理解出来なかつた。母さんが病氣で死んでもう何年もたつてゐるが普通に生活出来ていたし、どちらかといつと普通より裕福な方だつた。

父さんは大手企業の社長で俺はそこの嫡男。

金に困るような生活は送つていなかつたし、ましてや借金で家を売り払うなんて考へてもみなかつた。

どういう事だ? 父さんはいつのまに借金なんとしてたのか…?

とりあえず差し押さえとなつたからには家から出でていかないといけないし、今となつては真相も聞けないであらう借金の問題もこの家を売り払えば片付くだろう。なんせ、都会の一等地にたつてゐるし、家もなかなかにデカイから。生憎俺にはこの家に愛着とかそういう類いのものはないし、いづれ売らうと思つてゐたから好都合かもしない。ただ、父さんの借金で消えると思つと些か腹がたつが。

と、考へながら俺は荷物をまとめる為に家に入り一階にある自分の部屋に向かつた。

自分の荷物をまとめ一階にあるリビングにおりてくるとテーブルの上に白い紙切れがあいてあつた。

まさか父さんが死ぬ前に残した遺書とか？

と思いその紙を手に取つた。

なるほど、いくら憎んでいたとはいえ仮にも息子。最後くらい父親らしいことがしたくなつたのかなんて、微笑ましい思いは一瞬にして崩れ去つた。

### 借用書

¥3000000000-

見た瞬間田をしばたかせの数を数え始めた。

さ、さんおく…どうやつて借金したんだ？  
ただのローン会社じゃ無理な金額…闇金か。

父さんも墮ちたなと思った。息子に残すのが三億円の借金とは父親失格の前に人間失格だ。

ここにこの家を売り払つたとして返済できる額は多く見積もつて精々一億、となると俺は残りの一億をなんとかしなくちゃならないわけ…

と、考えこんでいると後ろから「ツツツ」と足音が聞こえてきた。

不動産の職員か？いや、こんな暗い時間に来るわけない。しかも靴

を脱いでいないうらしき…つてことは…

取り立てか。

取り立てらしの足音が背後から響いていた。足音の間隔から歩幅は狭そうだし「ツツツ」というどちらかといつと男の革靴といつより、女性のパンプスのような音からして、女性だろ？  
取り立てに女性を起用する会社があるのか…今じゃ男女差別とかそんなのはこういう危ない仕事にも適用されるんだな。

なんて、どうでも良いことを考えながら振り向くと、案の[足音]には女性が立っていた。

「あなたが春山玲慈くんかな？」

見た目どおり抑揚のない声で女性が問う。  
その女性はパーツが整い過ぎてまるでマネキンのような顔をしていた。  
微笑みをたたえている顔が石膏で塗り固められたかのように口もと以外ピクリともうごかない。  
そのくせ口調は妙に柔らかく馴れ馴れしかれ感じさせる。  
それ故か女性はある種の不気味さを醸し出していた。

「はい。」

嘘について偽名を名乗っても無駄だろ？

なんせ三億円も借金出来るような闇金会社だ。それなりにデカイだろ？  
取り立てにも事を穩便に運びつつも、もしもの場合は強行手段に出れるような人材を起用しているはず。

今回女性が来ているのは力量に信頼をおいていたからであつて、相

手は金持ちの坊っちゃん一人だと油断している訳ではないと思つ。

「そつか。」

「はい。」

無言。会話がない。金についてすぐに触れてくるだろ?と思つて、俺は拍子抜けした。

まあ良い、向こうが話そうとしたしないなら俺が話そう。

「あの……」

「なあに?」

俺は思いきつて聞いてみることにした。

「单刀直入に聞きますが、借金の取り立てにいらっしゃった闇金会社の方ですよね?」

女性は俺の言葉を聞いたあと驚いたように瞠目してから、あのマネキンのような顔を崩して実に人間らしい顔で笑つてみせた。

「あら、ふふふ、あなた頭の回転が速いのね。金持ちの坊っちゃんだからってなめてたのは私の方みたい。びっくりしちゃつた。私ねこんななりだからよく不動産の職員と間違えられちゃうの。あなたが初めてよ?」

でも一つだけ訂正、闇金会社じゃなくて、もつとキケンなところも

――――は?

いきなり饒舌になつた女性に驚いて聞き逃しかけたが脳内で

「もつとキケンなところも」

にエラーがかかつた状態でループしている。

闇金以上に危険つて…「ど」に借錢してくれてんだよ…と、しばらく呆然としていると、

「でも、本題なんだけど、アテはあるの?」

と女性が問うてきた。

借錢返済のアテだろ?か、それとも身寄りのアテだろ?か、なんて考えるほど俺は冷静さを失つてはいなかつた。これは確實に前者だ。

「いえ、ないです。」

「じゃあどうするの?借りたものは返さないとダメだよね。お父さんが勝手に借りてあなたが肩代わりつていうのは少し可哀想かもしれないけど、やっぱり家族だからさ。」

死んだ父親に家族面される日が来るとは…

「じゃあ、働いて返します。」

「ど?あのさ、あなた少し頭が良いからって私の事なめてるのかもしねないけど、こつちだつてだいぶあなたの事調べてるのよ?高一でバイト経験は無し。交遊関係はそこそこ広いが浅く広くってどこで親友と呼べる子は特にいない。どちらかというと取つつきにくいが喋つてみると面白いでも何処か一線引いてるって感じでしょ?」

スゴい。どちらかとこ?とからくだけはこの数十分間の俺を見て分析した結果だろ。

彼女の分析力に驚いた俺は何も言えずに黙つていた。

すると彼女は呆れたよにため息を一つ吐くと

「なんだ、失望した。初めてアタリの子かなあと思つたら、ダメか…面白くないなあねえ、最後に何か言いたいことある?」

アタリ、ダメ、最後

どういう意味だ?彼女は何かゲームでもしているのだろうか。とりあえず俺の場合つかみは良かつたらしい。だが、途中から「ダメ」になってしまったと、いうことだろうか。

「最後」ということは彼女は俺との会話を何らかの形で終わらせるつもりで、どうやら「キケン」なところに所属している彼女は俺に何らかの悪影響を及ぼす形でしめるつもりらしい。

俺が金を確実に返済出来るわけないと彼女は知っている。

じゃあどうすれば俺が働いて金を返済する意欲があると信じこませられるか、次の一言にかかるつて訳だ。決めるなら次。

と、大事な局面だと分かっていたのに俺は咄嗟にこういった。

「だったら、俺が働いて返せると思つてないなら、働き口紹介してくれださいよ。」

随分上から目線になってしまった。

ああ、こんなこと言つつもりじゃなかつたのに…

俺の人生これで終わりか、バラバラにされて売られたりするんだろうか?

なんて考えていると視界の隅で彼女がニヤリと不気味に笑つた

「もつか、そりへるか、やつぱアタリだ」

そう呟く声が近くで聞こえたと思つたら太ももに注射器のよつたものを刺されていた。

「ひやりお氣に附したらしき。

意識がブラックアウトする寸前にやつ思つた。

## 拉致された俺

ガガガガガガガガ

地響きがする…どうだ？…

…あ、そうだ、俺、意識を失つて…  
驚いて頭をあげると、そこは…

「おひとい・氣がついた？」

わつかのマネキン女だ。

俺の顔をのぞむと、ニヤニヤしてくる。

「はー。」

「氣分とかは悪くない？」

「平氣ですけど、さつきの薬何か副作用とかあるんですか？」

「んーん、別にない。聞いただけよ。社交辞令！」

「そうですか…で、あのこには…」

「おいおい、俺を無視して一人で話を進めるなんてひどいじゃないか」

いきなりワイルドなオジサンが話に割り込んできた。  
インカムをつけてて明らかに飛行機の機長の用な格好だ。

「こ」は飛行機で、あなたは機長ですか。」

「なんだ坊主、察しが良いな！説明するまでもねえわな！」

機長がこんなとこをつぶつこして良いのだ？機長がしな

ければならないのは離陸と着陸だけというのは知っているが、一応席から離れてはいけないとか…

「なあ坊主色々な」ちゅ「」ちゅ 考えてるみてえだがな、これは私用のジヒツ機だから良いんだよ。」

そういう事が、流石。

「パパは黙つて！ そんなことより！ 私あなたに説明しなくちゅいけないのよ、なんであなたをここにつれてきたのかを…。」

マネキン女が話の軌道修正をした。どうやらこの一人親子らしい。パパ、それにしてもパパが似合わない顔だ。

「あのね、私たちの勤めてる会社だけど本社は海外にあるの。まあイタリアなんだけどね。で、聞いたことあるかもしだれんけど、スペックオカンパーーって言うの。」

「表向きはな、」

スペックオカンパーー… 聞いたことはある。確か、最新鋭の技術を持つていてイタリアの政治は何%か近くその会社に牛耳られてるとか。

スペックオは日本語で鏡という意味があり、鏡が光を吸収するように他者からの意見を幅広く取り入れて、鏡が綺麗に虚像をつつすよう、望み通りにつくりあげるという願いを込めた会社らしい。

表向きは、とにかくこにはあえてつづこまないでおこづ。これでも大手企業の御曹司だつたこともあつてだいたいは想像がつく。裏で悪どいことをやつていてるとか、そんなんだらう。

「ええ、分かります。前に学校の課題で調べたことがありますから。それに表向きはということに関しても一応これでも大手企業の御曹司だったこともあって分かっているつもりです。」

すると、マネキン女と、そのパパは助かつたという顔をした。

「それなら、話が早いぜ？」

「もう！パパは黙つてて、いちいち説明にいやいやいれないでよ。」

「へいへい、悪かつたねーいつからこんな娘になつたんだか、な坊主。」

いきなり話をふられて焦つた。

だが、ここで親子ゲンカはやめにして説明に戾そつとまたマネキン女が軌道修正をした。

「それより一分かつているなら話は早いわ。

あなたにはその表じやない人達のお世話をしてもいいの」

意味が分からぬ。ならメイドを雇えれば良いのではないか？

「意味が分からぬって顔してゐるわね。仕方ないわ普通そつよ。じやあ説明するわね、えつと、」

「つまりだ！普通のメイドじゃその裏でなんやらやつてる連中の世話は見きれねえから頭の回転が速くて察しのいいてめえにやつてもうおつて魂胆つて訳だよ。

全く、女の話はなげえから疲れるよな？」

途中からマネキン女のパパに代わった。どうやらプライドが高いらしくマネキン女はぶつぶつと文句を言つてゐる。

「なるほど、金持ちの坊つちゃんで礼儀は一通り習つていて、男だから力仕事も出来るし、遠慮することもない。それにうちではメイドを雇つていなかつたから俺は家事も出来るし、借金返済の為に働いているんだから、給料も払う必要はない。

こんなオトク物件使わずにどうするつて訳ですね。」

と、俺の見解を述べてみたところ

「さっすが！ やっぱり私の見込んだ通り！！ 話が速くて助かるわ！」

「つて訳で、初日から仕事頑張れよ! じゃ、あ、なつと!」

いきなり窓を開けたと思ったら背中を突き飛ばされた！  
飛行機の窓から突き落とされた！

「パラシュートついてるからだいじよー」

大丈夫って言いたかつたのだろうが、もう風圧で聞こえない。

そのまま俺の意識はまたブラックアウトした。

—その頃機内では—

「あのこなじやつてくれる?」

「多分な、何だかんだ言つて巻き込まれてくれんだろ。」

「そうよね!-じゃあ期待してよつと!-将来良い男なりそな顔してたし!」

「おいおい!-結婚はさせないからな!」

「なによ!-パパの親バカ!」

なんてほのぼのとしたやりとりがされていた。

それをパラシユートで落ト中の衿慈は知るよしもない。

# おとされた俺

：痛い。全身に力が入らない。どうやら俺は自社用ジェット機からパラシュートで落とされたあと意識を失つたらしい。ゆっくりと目を開けると葉のついていない木々と、朝日が視界に映つた。

「は、 どうだ？ 森… か？」

あのマネキン女やそのパパの口ぶりからすると、JUJUはイタリアにある本社の敷地の中でも裏でなんやつけてる連中の敷地。ということは間違いないだろ？

それでもスゴいな、森まであるのか。实用性は限りなく謎だが。

ふと気がついた。俺は怪我をしていないだろうか？パラショートをつけていたとはいえ、かすり傷だけですむはずがない。

と思ふに確認したが、上体を起した。

「いじつ……！」

「た」まで発音できないほどの激痛が走った。

左肩に木の枝が貫通している。どうりで痛いわけだ。抜いてしまいたいが、生憎止血出来るようなものはないし、このままにしていた方が良策だろう。だが、このままではどちらにしろ出血多量で死は免れないと、とりあえず人を見つけようお、ボタボタとおぞましいまでの量の血をたらしながら俺は立ち上がった。

肩以外は幸いにして、落ち葉がクツンになつたらしく背中打撲ぐらいですんでいるがもし頭を打つたらあの二人はどうするのつも

りだったのか…

とりあえず森を抜けようと、フラフラ歩き出した。  
しばらく歩いても、森の出口は分からず俺がもといた場所に戻つて  
きたとき人を発見した。

白衣を着ていてしゃがみこんで俺のパラシユートと、血溜まりを見  
ている。  
綺麗な金髪できつとイタリア人なんだろう。

「あの、すみ…あ、そうだ、日本語通じないよな。え、excuse  
me. This is my blood.」

すみません。それ俺の血です。って何だ。

しぐじつた。変な声のかけ方をしたかもしれない。まず英語は通じ  
るんだろうか？

「え？君の血？ほ、ほんとだ！大変じゃないか！おいで、僕のプロ  
ットで治療しよう！」

俺に気付くや否や俺以上に慌てている。  
よく分からないうがこの人はいい人そうで警戒心が薄いということは  
分かった。

しかし、イタリア人に、しては随分と流暢な日本語だ。

## 白衣眼鏡のイタリア人と俺1

移動中幸いにして誰とも会うことなく、彼曰くプロットという研究室（？）のような場所で治療は無事終了した。

若干痛みはあるが、手際の良い丁寧な処置のおかげでだいぶ緩和された。これ以上悪化することは多分ないだろう。

「えっと、ところで君はどちら様かな？」

僕はスペツキオカンパニーのサイド・ディエトロ所属、医師兼研究員のロイス・ヴェンティ。君は？」

『ロイス』と言うらしい男は医師と言われて大変納得出来る顔立ちだ。見た目だけで判断するのは失礼だが、大きめの眼鏡にその奥で細められる優しそうな目、手入れのされた肩くらいで切り揃えられた髪の毛、男にしては長めだがだらしなくないのは彼が気品に溢れているからだろう。

「『』寧にありがとうございます。春山玲慈<sup>ハルヤマキヨウジ</sup>とります。」

当たり障りのない、挨拶で返した。

下手な事を言って不審度に拍車をかけたくない。

「そつか！それで君は一体何者なの…かつ、な？」

……警戒心が無さすぎると思つていて、こういうことか。あきらかにインテリ顔をしていて体の線も細く、運動が得意そつとはお世辞にも言えない彼もやはりまぎれもなく『裏で悪どいことをやっている連中』の一人のようだ。

『何者なの』で椅子から立つやになや、『か』で一気に俺との間合いをつめ、右の肘から手首の部分の腕を、俺の首にあて壁に押し付けた。いつのまに持つたのか、右手にメスらしき何かを持っている。その銀色の物体にあたり反射した光が俺の目を灼いた。

「か……はつ……。」

ギリギリと、壁に抑え込まれていてのためか息苦しくなつてきた。  
コイツは一体何がしたいんだ？

第一首なんか絞めたら分かるのも分からぬだらう。喋るにことはあらか、一步間違えれば殺す事だつてできる。

くわ、どうすればこの状況を開出来る？

今までの情報や記憶をたよりこなつと一〇通りほど考えた、その時  
絶妙なタイミングで奴の携帯端末が吉本新喜劇の音楽をならして鳴  
り響いた。

みつこよつて吉本新喜劇……か……。

## 白衣眼鏡のイタリア人と俺2

「お、やたやたー！」

さつきまでの緊迫した雰囲気はどうやら奴は、メール?と思われるものをチェックし始めた。

ダメたあと少しで才子。

卷之三

当然俺はそのまま床に落ちる訳で

ドサツ

۱۰۰

「… 分かっててやつてんのか？ 相当腹黒いな。  
と、そんな表情はおぐびにも出でず、内心でめぢやめぢや睨んでい  
ると

「ふふ、演技派なんだあ……意外だね？いや、」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5062x/>

---

巻き込まれ体質の傍観者

2011年11月4日16時18分発行